10 月 10 日のメッセージ

聖書：ローマの信徒への手紙　13：　1 – 10

「愛は律法を全うする」

聖書は「権威に従うように」と教えています(「人は皆、上に立つ権威に従うべきです。神に由来しない権威はなく、今ある権威はすべて神によって立てられたものだからです。」ローマの信徒への手紙 13:1)。なぜなら、権威は神によって立てられたものだからです。神に従うように権威にも従えと言います(「……あなたは権威者を恐れないことを願っている。それなら、善を行いなさい。そうすれば、権威者からほめられるでしょう。」ローマの信徒への手紙 13:2-3)。

神に対する従順は、旧約の昔から人々に求められてきたものです(「イスラエルよ。今、わたしが教える掟と法を忠実に行いなさい。そうすればあなたたちは命を得、あなたたちの先祖の神、主が与えられる土地に入って、それを得ることができるであろう。」申命記 4:1、「わたしは生い茂るオリーブの木。神の家にとどまります。世々限りなく、神の慈しみに依り頼みます。」詩編 52:10)。

人間は、そう教えられなければ、簡単に自分中心の誘惑に陥る存在です。また、自分に都合良く物事を利用しようとする存在です。「一言一句変えてはならない」(「あなたたちはわたしが命じる言葉に何一つ加えることも、減らすこともしてはならない。わたしが命じるとおりにあなたたちの神、主の戒めを守りなさい。」申命記 4:2)ことを逆手にとって、神の言葉を使って相手を罠にかけようとさえするのです(「それから、ファリサイ派の人々は出て行って、どのようにしてイエスの言葉じりをとらえて、罠にかけようかと相談した。」マタイによる福音書 22:15)。

イエスの返答は痛快です。律法に従うことの本質を突いています。全ては神のものであり、一時、誰かの手に託されているだけに過ぎません(「彼らは、『皇帝のものです』と言った。すると、イエスは言われた。『では、皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい。』」マタイによる福音書 22:21)。そのこともわからずに神の権威を笠に着てイエスをやり込めようとする姿は滑稽でもあります。全ては「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されます(「『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』、そのほかどんな掟があっても、『隣人を自分のように愛しなさい』という言葉に要約されます。」ローマの信徒への手紙 13:9、「第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』」マタイによる福音書 22:39)。隣人を愛さずに神を愛することなどできはしないのです。

また、権威への従順は、決して無批判なものではありません。神の愛を実現するためのものか。隣人愛を全うしようとしているか。神の慈しみに依り頼んでいるか。権威自身が問われています。もし権威がそのように歩んでいないならば、私たちは神に祈ります。「どうぞ正しき道を示し、歩ませてください」と。時には行動をもって思いを表すこともあるでしょう。

もちろんこの問いは自分自身にも向け続けなければなりません。自分に都合良く解釈しようとしてはいないか。権威を笠に着て自分の思いを実現しようとしていないか。

与えられた掟の穴を探すのではなく、愛によって全うする生き方を共に探していく道が今、示されています(「愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。」ローマの信徒への手紙 13:10)。

その道を歩む力はすでに与えられています。私たちに与えられている全てを神の業のために用いましょう。